

## 教職科目としての『音楽史』を考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-21 キーワード (Ja): 教職科目, 音楽史 キーワード (En): teacher-training subject, Music history 作成者: 佐藤, 昌弘, Sato, Masahiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/696">https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/696</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 教職科目としての『音楽史』を考える

Music history as teacher-training subject is considered

佐藤 昌弘

Masahiro Sato

## 1 はじめに

2017年度現在、筆者が主担当を務めている本学音楽学部と専攻科の授業『音楽史』は、主に西洋音楽と日本音楽の歴史を対象として、各時代で音楽がどのように創造されてきたか、その過程をあまねく学ぶことを主題としている。本学の『音楽史』は毎回ホールで開講され、舞台での生演奏を交えたレクチャー&コンサートの授業形態をとっており、かつ各回の授業テーマに応じて講師、演奏者を変えているところに大きな特色がある。『音楽史』は2015年度まで音楽学の澤田篤子教授が長らく主担当を務められて非常に尽力されたが、2016年度より筆者が主担当を受け継ぎ現在に至っている。

『音楽史』は通年30回の授業による通史科目であり、本学のカリキュラムでは他に、『ジャズの歴史1・2』『ピアノ演奏史』『管弦楽史』『オペラ史』『日本の伝統芸能と音楽』『諸民族の音楽』『古代、中世、ルネッサンスの音楽史』『バロックの音楽』『古典派の音楽史』『ロマン派、近・現代の音楽史』『日本音楽史』『東洋音楽史』といった各分野、各時代に特化した授業がそれぞれ別途用意されている。本学は現在、ピアノ、声楽、弦楽器、管楽器、打楽器、オルガン、クラシックギター、作曲、音楽教育、ジャズ、電子オルガン、音楽・音響デザイン、現代邦楽、ミュージカル、ロック&ポップス、バレエ、声優アニメソング、総合音楽といった多様な18の専攻を有しているが、『音楽史』はそれら全コース学生対象の「共通選択科目」である。そして『音楽史』は教職科目の一つでもあり、専攻の如何に関わらず教職課程を履修する学生は必ず修得しなければならない科目である。

ここ3年、『音楽史』には500を優に超える多くの学生が履修していて、その7～8割が教職課程履修者である。よってこの授業では、音楽を志す者にとって不可欠な音楽史の基礎理解力を養うとともに、学校教育での指導に必要とされる音楽史の知識を修得することが科目の目標となる。前任からの優れた授業体系を継承しつつも、『音楽史』を教職科目の側面からさらに充実させるための筆者の取り組み、考えについて本稿にて詳述したい。

## 2 教職科目として『音楽史』に求められるもの

### 2-1 教職科目における『音楽史』の位置

本学の教職過程で取得できる教員免許状は、次の通りである（洗足学園音楽大学教職センター 2015:3）（表1）。

表1 本学の教職課程で取得できる教育職員免許状

免許状の種類	教科	備考
中学校教諭一種免許状	音楽	
高等学校教諭一種免許状		
中学校教諭専修免許状		ただし、大学院または専攻科
高等学校教諭専修免許状		ただし、大学院または専攻科

※中等教育学校の教員となるためには、中学校と高等学校の両方の免許状が必要である。

※中学校の免許状を取得していれば、小学校の音楽専科教員として採用されることがある。

よって、本学における教職科目としての『音楽史』は、中学校の音楽科授業、高等学校での芸術科（音楽）授業における指導に必要とされる知識の修得が目標となる。ちなみに教職過程で学ぶべき授業科目は、教育職員免許法により、①「教科に関する科目」②「教職に関する科目」③「教科または教職必修科目」と大きく3種類に分けられ、『音楽史』は①に相当する。この①「教科に関する科目」は、音楽科の教育内容に関する科目で、1) ソルフェージュ、2) 声楽、3) 器楽、4) 指揮法、5) 音楽理論・作曲法（編曲法を含む）・音楽史（日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む）の5分野より構成されている（洗足学園音楽大学教職センター 2015:41）。

### 2-2 現行の学習指導要領に見る鑑賞活動の目標と内容

中学校の音楽科授業と高等学校の芸術科（音楽）授業はともに、学習指導要領の定めるところの「A 表現」領域（「歌唱」「器楽」「創作」の三分野）と「B 鑑賞」領域より成り、実際の指導にあたって音楽史の知識は「共通事項」としてその両領域に関わってくるが、「B 鑑賞」の方により大きな比重で関わってくるであろう。では、音楽科授業における「鑑賞」の指導のポイント、鑑賞教材選びの基準とは何であるか、それを現行の「学習指導要領」で確認したい。例えば「中学校学習指導要領解説 音楽編」の第2学年及び第3学年の目標と内容の項の中には以下の記載がある。

#### (2) B 鑑賞

(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を指導する。

- ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。
- イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して、鑑賞すること。
- ウ 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して、鑑賞

すること。

- (2) 鑑賞教材は、我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに適切なものを取り扱う。(文部科学省 2008 : 51-53)

上記の指導の目標と内容から、教職教科科目としての『音楽史』では授業内容として、以下のことを確実に網羅することが求められよう。

- ① 様々な時代、様々な国の様々な音楽を横断的に紹介
- ② それらの音楽の特徴となるそれぞれの様式と語法についての説明
- ③ それぞれの音楽が生まれた時代の社会、文化、他の芸術との関連性についての説明

なお、これらの網羅については、4. 前期の授業における表2(日本と西洋の二つの異なる音楽文化の比較)、及び5. 後期の授業における表3(様式と語法にかかる学習)の授業計画に基づく授業実践により成り立たせることを後述したい。

### 2-3 新学習指導要領に見る鑑賞活動の目標と内容

2017年3月に「新学習指導要領」が公示されたが、例えば「中学校学習指導要領」(2021年度施行予定)の第2章・第5節 音楽の項における第2学年及び第3学年目標と内容には次のように記されている。

#### B 鑑賞

- (1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら、次の(ア)から(ウ)までについて考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと。

- (ア) 曲や演奏に対する評価とその根拠
- (イ) 生活や社会における音楽の意味や役割
- (ウ) 音楽表現の共通性や固有性

イ 次の(ア)から(ウ)までについて理解すること。

- (ア) 曲想と音楽の構造との関わり
- (イ) 楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わり
- (ウ) 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性 (文部科学省 web 2017 : 87)

上記で注目すべきは、新たな内容として加えられたアの項目であり、これは明らかにアクティヴ・ラーニングとして鑑賞活動をも指導を展開することが示されている。2021年度以降の中等教育における音楽の授業では、生徒たちが1つの楽曲を、より多面的に聴き、主体的に感じ取り考えられる指導をしていく必要があり、これまで以上に教員の見識の高さと創意工夫が求められることは明らかである。そのような高次で幅広い知識を養うことは『音楽史』の学修後にそれぞれの学生が、『諸民族の音楽』や『オペラ史』など各時代、各分野に特化した音楽史科目で引き続き学び深めていくことによって達成されるものである。『音楽史』はあくまでその前提となる通史科目であるからこそ、基本的な知識を着実に教授すること、全体的な歴史の流れを理解させることこそが求められるのである。よって『音楽史』では、「わかりやすさ」を重視し、ポイントを絞った明快な講義こそを講師は心掛けるべきであり、いかに大切な

ことをダイジェストに伝えていくかに主眼を置く授業であるべきなのである。

### 3 授業でとりあげる音楽の分野、範囲について

2-2で、教職教科科目としての『音楽史』は、様々な時代、様々な国の様々な音楽を横断的に紹介する必要があることを記したが、一方で年間30回しかない通史の授業という条件下にあるゆえに、現実問題としてとりあげる音楽の分野、範囲をある程度絞らなくてはならない。その根拠をどこに求めるかという点、次の3点を基準とした。

第一は、前任の澤田教授が構築した授業計画の概要、すなわち「30回中、最初の2回は日本音楽史と西洋音楽史の各概要などにあて、第3回以降、日本音楽を6回、諸民族の音楽を1回、他の全回は中世から現代の西洋音楽史とポピュラー音楽をとりあげる」ことを継承することとした。

第二は、通史授業としての性質を考慮し、かつ中等教育での指導に役立つために、もっぱら知名度の高い音楽、それぞれの作曲家、アーティストの代表曲を扱うということとした。近年本学は専攻が多様化しており、履修者の中にはこれまで芸術系の音楽に縁遠かった学生も少なくないため、学術的な事項よりも、一般常識的な事項をしっかりとおさえて、広く知られている名曲は極力とりあげる方針とした。

そして第三は、現行の中学校と高等学校の音楽の教科書に掲載されている楽曲を積極的にとりあげることである。たとえば、教育芸術社の「中学の音楽1」「中学の音楽2・3上」「中学の音楽2・3下」（以上、2017年2月10日発行）では、鑑賞教材として以下の楽曲が掲載されている。

#### 【中学の音楽1】

- ・ A. ヴィヴァルディ／春—第1楽章—（「和声と創意の試み」第1集「四季」から）
- ・ F. シューベルト／魔王—Erlkönig—
- ・ J. ウィリアムズ／“ジョーズのテーマ”（映画「ジョーズ」から）
- ・ 八橋検校／六段の調
- ・ 巢鶴鈴慕（琴古流古典本曲）
- ・ ソーラン節（北海道民謡）※

#### 【中学の音楽2・3上】

- ・ J.S. バッハ／フーガ短調
- ・ L.V. ベートーヴェン／交響曲第5番ハ短調
- ・ G. ヴェルディ／「アイダ」から
- ・ 四世杵屋六三郎／「勸進帳」から
- ・ 「新版歌祭文」“野崎村の段から”
- ・ アカベラの合唱曲 ※
  - ① R.L. ピアサル／花輪をかけよ ② ビレンツェの歌（ブルガリア民謡）
  - ③ アメイジング・グレース（賛美歌） ④ ガレカフリ サチダオ（ジョージア民謡）

#### 【中学の音楽2・3下】

- ・ W.A. モーツァルト／「レクイエム」から“ラクリモサ”（涙の日）



- ・ F. ショパン／エチュード ハ短調「革命」
  - ・ M. ムソルグスキー／組曲「展覧会の絵」
  - ・ B. スメタナ／ブルダバ（モルダウ）（連作交響詩「わが祖国」から）
  - ・ J. ロドリゴ／「アランフェス協奏曲」から第2楽章
  - ・ 武満 徹／ノヴェンバー ステップス
  - ・ 平調「越天楽」—管絃—
  - ・ 「羽衣」から ※
  - ・ ポピュラー音楽
  - ① B. メイ／ウィ ウィル ロック ユー ② B. エヴァンス／ワルツ フォー デヴィ
  - ③ A.C. ジョビン／おいしい水
- ※ = 歌唱教材と共通

このように鑑賞教材だけを見ても、バロックから現代までの各時代を代表するクラシック音楽の名曲があり、雅楽、能楽、箏曲、尺八古典本曲、歌舞伎の長唄、文楽の義太夫節、民謡のソーラン節といった有名な日本の伝統音楽があつて、ロック、ジャズ、ボサノヴァの代表的ナンバーや、世界の民謡、賛美歌、映画音楽までがあり、様々な時代、様々な国の多様にして著名な音楽が集約されている。まさに音楽の教科書は、『音楽史』でとりあげる音楽、範囲についての一つのスタンダードに十分なり得よう。

以上を踏まえて、筆者が授業主担当となった2016年度以降の『音楽史』を、どのように監修したかを次項、次々項で説明したい。

#### 4 前期の授業

前期では全15回中、ガイダンスと概要等に初回2回をあて、第3回以降は日本音楽史について全6回、中世から古典派までの西洋音楽史について7回をあてた。第3回から第15回までは、日本音楽の回の授業と西洋音楽の回の授業を交互に行うことで、これら2つの異なる音楽文化についての比較を促すための一助とした（表2）。

表2 2017年度『音楽史』前期授業の一覧 (敬称略)

回	テーマ	講師	演奏者
01	ガイダンス・ピアノで聴く時代の響きの移り変わり	佐藤昌弘 橋晋太郎	佐藤昌弘 (Pf)
02	西洋音楽史と日本音楽史の概要	佐藤昌弘 澤田篤子	
03	グレゴリオ聖歌	尾山真弓	橋本周子 (Cond) カペラ・グレゴリアーナ・ファヴォリート
04	雅楽	澤田篤子	真鍋尚之 (笙) 本多恵昭 (箏) 柴田裕史 (横笛)
05	中世・ルネサンスの声楽	久行敏彦	辻 康介 (Cond) カペラ・グレゴリアーナ・ファヴォリート
06	仏教音楽 (聲明)	澤田篤子	前川睦生
07	ルネサンス・バロックの器楽	那須田務	柿原順子 (Rec) 水戸茂雄 (Lute) 岡田龍之介 (Cem)
08	中世日本① 琵琶	薦田治子	熊田かほり (琵琶)
09	バロックオペラ	芦川紀子	内藤明美 (M Sop) 中谷路子 (Pf) 馬場由香 (Sop) 岡田龍之介 (Cem) 西谷尚己 (Va da gamba)
10	中世日本② 能楽	澤田篤子	鶴澤 光 鶴澤 久 八反田智子 飯富孔明 原岡一之 林雄一郎
11	バッハ	佐藤昌弘	萩野由美子 (Org) 佐藤昌弘 (Pf)
12	近世日本① 舞台の音楽	澤田篤子	清元一太夫 清元美十郎
13	古典派① ハイドン、モーツァルト	西釋英里香	神谷明美 (Sop) 皆川順一 (Pf)
14	近世日本② 室内の音楽	森重行敏	野澤佐保子 (箏) 山口賢治 (尺八) 木村伶香能 (箏、三味線)
15	古典派② ベートーヴェン	佐藤昌弘	濱田彰子 (Vn) 小林沙紀 (Vn) 鈴木大樹 (Va) 黒川実咲 (Vc) 佐藤昌弘 (Pf)

筆者が副担当として授業に関わり始めた2015年度、前期授業では「インド：東と西の間で―表現の原点をさぐる」の回があったが、これを2016年度からは後期にまわし、西洋音楽史を「古典派② ベートーヴェン」という切りの良い回で前期を終えられるよう配分した。第1回の「ピアノで聴く時代の響きの移り変わり」は、ピアノという西洋音楽を代表する楽器の発展とシンクロニゼーションして、J.S. バッハ (1685-1750) から G. ガーシュウィン (1898-1937) までの各時代を代表する作曲家たちが、どのようにピアノに向かい音楽を創造したか、解説を交えながらのピアノ演奏を通じてたどるというものである。日本音楽史と西洋音楽史の各概要の第2回を経て、第3回以降が各回個別テーマの授業となっていくが、全6回の日本音楽史に関しては前任の授業テーマ、内容が大変完成されたものであるため、そのまま踏

襲した。

一方、前期の西洋音楽史の授業テーマは2016年度に少々手を加えた。筆者が副担当であった2015年度『音楽史』前期のルネサンスからバロックまでの西洋音楽史の授業テーマは次のようなものであった。

- ・中世・ルネサンス — 単声音楽から多声音楽へ
- ・ルネサンス・初期バロック — 器楽作品の発達
- ・バロック — オペラの成立
- ・バロック — 器楽を中心に

ここに西洋音楽史上最大の巨匠バッハに特化した回を加える必要を強く感じ、2016年度以降は上記4つを3つにまとめ、新たにバッハの回を加えて次のようにした（バッハの回は筆者が講義を受け持つこととしたが、その授業の実際については後述する）。

- ・中世・ルネサンスの音楽
- ・ルネサンス・バロックの器楽
- ・バロックオペラ
- ・バッハ

また、これまでの第13回「古典派② ハイドン、モーツァルト」では、「オペラ・セリア」という項目を説明するためかとは思われるが、W.A.モーツァルト（1756-1791）のオペラ《皇帝ティートの慈悲》K.621（1791）のような、それほど耳にする機会が多くない作品がとりあげられている一方で、著名な作品がほとんどとりあげられていなかった。やはり一般に広く知られている曲というと、J.ハイドンでは（1732-1809）交響曲第94番ト長調「驚愕」Hob.I-94（1791）や弦楽四重奏曲第67番二長調「ひばり」Op.64-5 Hob.3-63（1790）、モーツァルトであれば弦楽セレナーデ第13番ト長調「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」K.525（1787）、第25番K.183（1773）と第40番K.550（1788）の2つのト短調交響曲、ピアノソナタ第11番イ長調「トルコ行進曲付き」K.331（1783）、レクイエム 二短調K.626（1791）などであろう。2017年度では担当の講師と演奏者に相談をして、これらの名曲をとりあげることとあわせ、ハイドン、モーツァルトそれぞれの最大の音楽業績は何かということをより明確に打ち出して（前者は交響曲と弦楽四重奏曲の確立、後者は一連のオペラ作品）、授業内容を新たなものとした。

## 5 後期の授業

### 5-1 ロマン派の音楽

後期15回は、初回にインド音楽をとりあげ、第2回から第12回の11回をロマン派から現代までの西洋音楽史にあて、第13、14回の2回でポピュラー音楽をとりあげて、最終回は総括とした。



表3 2017年度『音楽史』後期の授業計画一覧(敬称略)

回	テーマ	講師	演奏者
01	諸民族の音楽 インド	小日向英俊	小日向英俊 逆瀬川健治
02	ロマン派① 歌曲 (シューベルト、シューマン、ブラームス)	那須田務	宇野徹也 (Bar) 紙谷弘子 (Sop) 白澤暁子 (Pf)
03	ロマン派② ピアノ曲 (ショパン、シューマン、リスト、ブラームス)	橘晋太郎	草 冬香、白澤暁子 (Pf)
04	ロマン派③ オペラ (ヴェルディ、ビゼー、プッチーニ)	那須田務	柳澤涼子 (Sop) 中鉢聡 (Ten) 谷川 明 (Pf)
05	ロマン派④ 標題音楽と楽劇 (ベルリオーズ、ワーグナー)	橘晋太郎	安藤江利、柿崎俊也 (EO)
06	後期ロマン派 (マーラー、R. シュトラウス、シベリウス)	佐藤昌弘	内藤明美 (M Sop) 中谷路子、佐藤昌弘 (Pf)
07	民族主義① ロシア (ムソルグスキー、チャイコフスキー、R= コルサコフ)	大宅 緒	石澤優花 (Pf)
08	近代① フランス (ドビュッシー、ラヴェル)	佐藤昌弘	星野苗緒、佐藤昌弘 (Pf)
09	民族主義② 北欧、東欧、南欧 (グリーグ、ドヴォルザーク、スメタナ、バルトーク、ロドリゴ)	浦本裕子	藤井隆史、白水芳枝 (Pf)
10	近代② ロシア (ラフマニノフ、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ショスタコーヴィチ)	佐藤昌弘	日置寿美子、松岡 淳 (Pf)
11	新ウィーン楽派の表現主義と12音技法	橘晋太郎	内藤明美 (M Sop) 佐伯周子 (Pf)
12	現代 (ミュージックセリエル、ミュージックコンクレート、チャンスオペレーション、ミニマルミュージック 他)	松平 敬	松平 敬 (Bar) 橋本普哉 (Tuba)
13	ジャズ・ポピュラー (デューク・エリントンからビートルズまで)	佐藤昌弘	原 朋直 (Tp) 朝田拓馬 (Gt) 池尻洋史 (Bs) Dennis Frehes (Ds) 佐藤昌弘 (Pf)
14	ミュージカル 音楽史に関わる人名、用語の表記法	篠原 真 佐藤昌弘	篠原真 (Pf) ミュージカルコース生、卒業生
15	まとめ	佐藤昌弘 橘晋太郎	

八

また2016年度からは表3にあるように、後期の授業計画では授業テーマとあわせて扱う作曲家、アーティストのグルーピングを明示した。

西洋音楽のロマン派をジャンル別に扱うという前任の優れた授業計画は踏襲した。ただし、前任はロ

マン派を、ピアノ曲、歌曲、オペラ、標題音楽・楽劇の計4回に設定されていたが、筆者はロマン派をもう1回増やして全5回とした。加えた1回は「後期ロマン派（マーラー、R. シュトラウス、シベリウス）」で、講義は筆者自らが受け持った。1860年代生まれのこの3人の著名な作曲家は、筆者が副担当であった2015年度の『音楽史』ではとりあげられていなかったが、紹介しなくてはならない重要な作曲家と考え2016年度以降はとりあげることとした。特にJ. シベリウス（1865-1957）は、代表曲の1つである交響詩「フィンランディア」Op. 26（1899）の合唱編曲が中学の音楽の教科書にとりあげられているので外せないところである。また、シベリウスは一般に民族主義の作曲家としてカテゴライズされることの方が多いが、ちょうどG. マーラー（1860-1911）とR. シュトラウス（1864-1949）が「歌曲」、R. シュトラウスとシベリウスが「交響詩」という共通の分野で括れるため、実際に授業を行ってみてこの3人の作曲家を同じ回で扱っても違和感ないものとなった。

さらに、ロマン派のオペラの回であるが、2015年度の授業では「イタリア・オペラを中心に」の副題のもとベルリーニやプッチーニがとりあげられていたが、2016年度からは、ロマン派のオペラ作品の中でも群を抜いて著名で、高校の音楽の教科書にもとりあげられているフランスのG. ビゼー（1838-1875）の代表的オペラ《カルメン》（1875）を授業で扱う必要を感じ、授業テーマを「ロマン派③ オペラ（ヴェルディ、ビゼー、プッチーニ）」とした。

## 5-2 民族主義、近代の音楽

民族主義については、全2回中1回を北欧、東欧、南欧とし、もう1回をロシアとするという前任の授業計画を踏襲した。ただし2016年度の授業からは各回で扱う作曲家、実演でとりあげられる作品を一新した。筆者が副担当であった2015年度では、北欧、東欧、南欧の回がギター音楽ばかりがとりあげられていたが、そこに著名な作曲家の名はほとんど見当たらなかった。そこで担当講師の了解を得て、2016年度の授業より実演はギターから2台ピアノに変更、とりあげる作曲家はノルウェーのE. グリグ（1867-1907）、チェコのA. ドヴォルザーク（1841-1904）とB. スメタナ（1824-1884）、スペインのH. ロドリゴ（1901-1999）というメジャーな作曲家ばかりとし、2017年度ではハンガリーのB. バルトーク（1881-1945）も加えた。

また、2015年度の民族主義のロシアの回では、S. ラフマニノフ（1873-1943）が大きくとりあげられていたが、ラフマニノフという作曲家は、民族主義、後期ロマン派、近代のいずれにもカテゴライズすることが可能ではあるものの、ロシアの民族主義を代表する作曲家であればM. ムソルグスキー（1839-1881）、もしくはP. チャイコフスキー（1840-1893）の方が妥当であると考えた。そこで担当講師の了解のもと、2016年度からの民族主義のロシアの回はおもに19世紀後半に活躍した作曲家に限定し、とりあげる作曲家はムソルグスキー、R= コルサコフ（1844-1908）などのロシア五人組とチャイコフスキーとして、実演は中学の音楽の教科書にとりあげられているムソルグスキーの組曲「展覧会の絵」（1874）全曲とした。ラフマニノフは結局、2017年度の授業よりI. ストラヴィンスキー（1882-1971）、S. プロコフィエフ（1891-1953）、D. ショスタコーヴィチ（1906-1975）とともに、「近代② ロシア」の回でとりあげ、筆者が講義を受け持つこととした。

ストラヴィンスキーは2015年度の『音楽史』では、「新古典主義 —古の回帰」という回でF. プーラ

ンク（1899-1963）とともにとりあげられて、作品ではバレエ音楽の《春の祭典》（1913）と《プルチネルラ》（1920）にスポットがあてられていた。ストラヴィンスキーの新古典主義の作品群も優れていることは確かだが、彼の最大の音楽的業績といえば、やはり《火の鳥》（1910）《ペトルーシユカ》（1911）《春の祭典》の三大バレエ音楽であろう。2016年度の授業では「近代② ロシア」の回において、ストラヴィンスキーは《ペトルーシユカ》と《春の祭典》の2作品のみをとりあげ、2作品の主要な作曲技法を説明し、新古典主義については、ストラヴィンスキーではなくプロコフィエフの音楽と絡めて紹介することとした。そのプロコフィエフとともに社会主義リアリズムの作曲家を代表するショスタコーヴィチもあわせて紹介し、多様な20世紀のロシア音楽を俯瞰することを意図した（表4）。

表4 西洋音楽の民族主義、近代の回の2015年度と2017年度の授業テーマ表記の比較

2015年度	2017年度
民族主義—ロシア音楽を中心に	民族主義① ロシア（ムソルグスキー、チャイコフスキー、R= コルサコフ）
民族主義—北欧、東欧、南欧	民族主義② 北欧、東欧、南欧（グリーグ、ドヴォルザーク、スメタナ、バルトーク、ロドリゴ）
近代（フランス）音楽—ドビュッシーを中心として	近代① フランス（ドビュッシー、ラヴェル）
新古典主義—古への回帰	近代② ロシア（ラフマニノフ、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ショスタコーヴィチ）
十二音技法	新ウィーン楽派の表現主義と12音技法

### 5-3 現代、ポピュラーの音楽

後期の西洋音楽史は、主に1945年以降の前衛音楽を扱う現代の回で締め括る。その後2回にわたってとりあげるポピュラー音楽は、1回は2015年度と同じくミュージカルの回で、もう1回は2016年度より新たに設けた「ジャズ・ポピュラー（デューク・エリントンからビートルズまで）」である。ジャズはあらゆるポピュラー音楽の源流であり、また、20世紀後半から現在に至るまでのポピュラー音楽シーンの最大のエポック・メイキングはビートルズの音楽活動であると見、これらを中心とした回とした。

## 6 成績評価について

2017年度『音楽史』の成績評価の方法及び基準であるが、まずシラバスには以下のように明示した。

- ・授業への参加姿勢（評価の50%）と学年末試験（評価の50%）

前期の授業が終了した時点で、現・授業副担当の橋晋太郎講師とあらためて成績評価の方法及び基準の細目について検討した結果、上記の他にレポート課題提出を必須とすることを追加し、後期初回の授業内で告知することとした。なお、レポートは、その執筆内容が整っていれば「認定」の判定をし、原則として点数という形で直接成績には反映されない。

しかし「SとAの評価は履修登録者全体の28%を上限とし、かつS評価は3%の上限を超えないものとする」という規定がある関係上、成績上位者で同点があった場合、どちらに優劣をつけるかの価値基準をレポートの出来におくこととした。

## 7 授業の配布物と出席登録

『音楽史』では毎回、A4サイズ両面に印刷されたプログラム1枚を学生に配付している。このプログラムには実演の演目、演奏曲目の解説、講師と演奏者のプロフィールを掲載している。講師の要望があれば、A3サイズ両面1枚を越えないことを条件にさらに別途資料も配布している。大学院生の固定TAが4名、毎回授業のサポートにあたり、これら配布物の準備も行っている。出席は授業開始の5～10分ほどに、前の席から後ろの席にかけて3台のカードリーダーを分けて回し、それに学生が順次学生証をかざすことで登録処理される。

## 8 授業の実例 — バッハの回を例に

授業の進め方は各回の講師に任されているが、ほとんどの講師がPCのパワーポイントを駆使して講義を行っている。本学のホールステージ奥にはパイプオルガンが設置してあるが、それを覆うように巨大スクリーンが下され、データがプロジェクターを通して投影される。筆者も講義担当のおりはほとんどこの方式を用いているのだが、前期第11回「バッハ」だけは、オルガンの実演があるために断念せざるを得なかった。では実際に筆者がどのように「わかりやすさ」を重視しポイントを絞って講義を組み立てているか、2017年度のバッハの回を例に説明しよう。<sup>注1)</sup>

まず授業開始の15分で、オルガンの実演に先立って奏者の荻野由美子講師にパイプオルガンの説明をダイジェストで行って頂いた。このときだけスクリーンを下してプロジェクターで説明用映像を投影した。この後にスクリーンを上げ、残りの75分で実演とPCを使わないで講義をこなさなければならない。J.S. バッハという膨大な作品録と情報を有す巨匠を、極力ダイジェストにわかりやすくまとめるにあたり、最も有名な以下3曲を実演と講義の骨子とすることとした。

- (1) 管弦楽組曲第3番ニ長調 BWV1068 第2曲「エール」(1729 ←→ 31)
- (2) トッカータとフーガ ニ短調 BWV565 (1708 以前)
- (3) カンタータ第147番《心と口と生きざまは》BWV147 より第6曲及び第10曲  
コラール合唱「主よ、人の望みの喜びよ」(1716 / 1723 初演)

上記3曲から、「組曲」「BWV」「フーガ」「カンタータ」「コラール」というキーワードが自ずと浮かんでくる訳で、この4項目の説明を中心に講義を組み立てた次第である。実演は、オルガン演奏が(2)と、中学校の音楽の教科書にも載っている「フーガト短調 BWV578」(1707 以前?)、それに廣野嗣雄がオルガン独奏に編曲した(3)の計3曲を荻野講師に演奏して頂いた。加えて筆者のピアノ演奏でT.A. Johnsonがピアノ独奏用に編曲した(1)と、フランス組曲第2番ハ短調 BWV565 (1724 頃)の2曲を演奏した。以上の実演で30分近くを要するため、残りの45分内で講義をしなければならないが、



先述の4つのキーワードを反映させて次のような3つの区分で講義を進めた。第1の区分はBWVの説明を取っ掛かりにバッハのプロファイルを時代背景、社会状況とも絡めて紹介し、(1)と(2)の実演へ。第2の区分はフーガ、組曲というバッハの楽曲の代表的な音楽形式を、フーガ短調とフランス組曲第2番の実演を交えながら説明。第3の区分はバッハの作品群の中で最重要の位置を占める宗教音楽について、カンタータ、コラールの説明を中心に紹介。ここでバッハの最高傑作と評価されることの多い「マタイ受難曲 BWV244」（1727 以前）についても紹介し、第1曲合唱「来たれ、娘たちよ、われと共に嘆け」の音源を流した。総括として、終生オペラを1作も書かず、ひたすらポリフォニーを究めたバッハは、バロック時代としてはどちらかというと異端な存在であり正当な評価を得るまで没後約1世紀を要したこと、またバッハは、バロック時代までに形成されてきた音楽を総合し、以後の音楽の基盤を確立し模範となったため、現代の視点からではバッハ以前の西洋音楽は「古楽」であり、クラシック音楽はバッハに始まると考えられることとまとめ、(3)のオルガン演奏で終了した。

## 9 おわりに

履修生は大ホールで演奏会さながらに、毎回生演奏を聴くことが出来るのは本学『音楽史』の大きな特色ではあるが、一方でそのことにより、講師にとって講義時間が制約されること、履修生はホール客席で受講するためメモなどの筆記が困難になること、マイクを通しての講師の声が響き過ぎて客席で聞き取りにくいケースが見られることなどがあるのもまた事実である。そして500を越える学生が受講している中、どうしてもこちらからの一方的な講義、実演に終始しがちで、十分なアクティヴ・ラーニングが展開できていない。西洋音楽史の授業でいえば、グレゴリオ聖歌の時代から続いていく音楽とキリスト教との密接な関わり合い、各時代での音楽様式と他の芸術様式との照応、社会情勢の変化や文化、科学の発展がとりわけ18世紀以降に人々の音楽の享受の仕方を大きく変えていくことなど、世界史の変遷のダイナミズムと音楽の進化の関係についての言及を不可欠としているが、それを学生がどこまで正しく理解しているか、講義中心の授業ではなかなか測りがたいところである。次年度以降では、随時ミニ・レポートを課すなどして、学生が能動的に理解する場を設けたい。このように授業の内容面、運営面共々工夫、改善の余地があり、加えて多様性をうたっているながら「諸民族の音楽」が僅か1回のみまでよいかなど、今後の課題となろう。実際の教育の現場で生かせる知識の基盤をしっかりと履修生たちに教授出来るよう、ますます鋭意努力していきたい所存である。

### 注

1) 以下がバッハの回で配付したプログラム中の筆者による曲目解説である。

#### ●BWVとは？

“BWV”とは、「バッハ作品目録番号」のことです。現在は1100以上の数におよびます。ヴォルフガング・シュミーダーという音楽学者が1958年にまとめました。しかしその後、新たに曲が発見されたり、偽作が判明したりすることが絶えず、更新を重ねてきました。1～524はカンタータやミサなどの声楽作品、525～1000までが鍵盤楽器作品とリュート曲、1001～1040が弦楽器、フルートの独奏曲と室内楽曲、1041～1065が協奏曲、1066～1071が管弦楽曲、1072以上がその他になります。バッハは65年におよぶ生涯で、



あらゆるジャンルに名曲を残したといってもいいのですが、なぜかオペラだけは1曲も作曲しませんでした。

●G線上のアリア

原曲は、管弦楽組曲第3番 二長調 BWV1068 の第2曲で、弦楽合奏を中心に演奏されるものです。あまりにも美しいメロディーなので、いろいろな楽器に編曲されています。アウグスト・ウィルヘルミというヴァイオリニストが、原曲を9度も下げてハ長調にし、ヴァイオリンの最低弦であるG線で完奏できる編曲をしたところから、このタイトルで知られるようになりました。

●トッカータとフーガ 二短調 BWV565

この曲の出だしはクラシック音楽の作品中、有名度ナンバーワンといえましょう。しかし、バッハのオルガン曲の代表作であるはずのこの曲が、実は他の人が作曲したのだという偽作説があとをたたないのです。真偽のほどはいまだに謎ですが、一応バッハ20代の作とされています。「トッカータ」(Toccat)は、速い音型が連続する即興的な音楽形式で、この曲では最初の3分ほどがそれにあたります。続く「フーガ」(Fuga)は1つの主題(テーマ)をいくつかの声部で、調を変え、形を変え模倣し合う、バッハがもっとも得意とした形式です。

●小フーガ ト短調 BWV578

バッハのオルガン曲では、ト短調のフーガというと、他に「幻想曲とフーガ ト短調」という大規模な曲があり、それと区別するため「小フーガ」という呼び名がつけました。フーガは曲の始まりに大きな特徴があります。出だしは、たった1つの声部が単旋律で「主題」を主調で演奏します。この主題を遅れて第2の声部が属調でカノンします。これを「応答」といいます。続いて第3の声部が主題を奏で、さらに続いて第4の声部が応答を奏でるといように、順番に声部が増え、主題や応答などのフレーズが重ねられていきます。なお、この曲の最後は長三和音で終わる「ピカルディー終止」です。

●フランス組曲第2番 ハ短調 BWV813

バッハの作品によく見られる「組曲」とは、いくつかの性格の異なる曲を、連続して演奏するようにセットした器楽の音楽形式です。バッハの時代の組曲は、連続する各曲が、いろいろな国の「舞曲」でした。セットになる曲数に規則はありませんがふつう6~8曲で、全曲は1つの調で統一されます。「フランス組曲」は6作品あり、もともとチェンバロやクラヴィコードのために書かれた作品ですが、現代ではピアノで演奏されることが多く、第2番の構成は以下です。

- ①アルマンダ…ドイツの舞曲。4拍子でミディアムテンポ。
- ②クーラント…イタリア風の場合、3拍子でアップテンポ。
- ③サラバンド…スペインの舞曲。3拍子でスローテンポ。
- ④アリア …この曲だけ舞曲ではない。旋律的性格を持つ。
- ⑤メヌエット…フランスの舞曲。3拍子でミディアムテンポ
- ⑥ジーク …イギリスの舞曲。3拍子系でアップテンポのフィナーレ。

●主よ、人の望みの喜びよ

バッハが数多く作曲した「カンタータ」(Cantata)とは、オーケストラをとまなう声楽曲をいいます。1曲のカンタータは、独唱曲、重唱曲、合唱曲など複数の曲で構成されます。バッハのカンタータのうち、宗教的なものは「教会カンタータ」、それ以外のは「世俗カンタータ」と呼ばれます。バッハは、生涯の大部分を教会音楽家として送り、礼拝で演奏するために200以上もの教会カンタータを作曲しました。そのうちの1曲、第147番《心と口と生きざまは》BWV147には曲中、有名な「コラール」(Choral)《主よ、人の望みの喜びよ》が含まれています。コラールとは合唱で歌われる賛美歌のことです。

引用・参考文献

- 洗足学園音楽大学教職センター編 2015 『教職過程履修ハンドブック』洗足学園音楽大学  
 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社

小原光一ほか 14 名著 2017 『中学生の音楽 1』教育芸術社

小原光一ほか 14 名著 2017 『中学生の音楽 2・3 上, 下』教育芸術社

小原光一ほか 14 名著 2017 『中学生の器楽』教育芸術社

小原光一ほか 8 名著 2017 『MOUSA 1, 2』教育芸術社

井上和男編著 2009 『クラシック音楽作品名辞典 (第3版)』三省堂

D.J. グラウド / C.V. パリスカ著 戸口幸策、津上英輔、寺西基之共訳 2001 『新 西洋音楽史 上, 中, 下』音楽  
之友社

岡田暁生著 2005 『西洋音楽史「クラシック」の黄昏』中央公論社

磯山 雅著 2010 『バッハ=魂のエヴァンゲリスト』講談社

#### ウェブサイト

文部科学省 web 『中学校学習指導要領』

[www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf) (ア  
クセス日: 2017 年 7 月 6 日)